



2012年4月入職

つじもとせいや
辻元晴也

尊敬する父の背中を、これからも追いつきたい

食卓で何度も聞いた感動的なエピソード

私の父は臨床工学技士として透析業務に関わっていて、患者さまとの感動的なエピソードを食卓で聞く機会は子どもの頃から日常的にありました。中々打ち解けられなかった患者さまと趣味の話で共感できた、命が危なかった患者さまを助けることができた、などの様々なエピソードを聞いているうちに、私もいつしか人のために働きたいと思いはじめるようになりました。臨床工学技士になりたいと打ち明けた高校3年生のとき、父は「応援するから頑張れ」と強く背中を押してくれました。

自分が臨床工学技士になった今、父のすごさを改めて感じています。臨床工学技士は忙しい仕事ではあるものの、その合間を縫ってしっかりと家庭を顧みてくれました。"患者さまのため"だけでなく、"家族のため"という姿勢も大切にしてくれていたのです。今でも仕事について父と話すことは多々あります。思いやりエキスパートになったことを伝えるときも喜んでくれました。これからも大きな背中を見ながら成長していきたいと思っています。

今でも大切に保管している、長文のお手紙



子どもの頃に父が話してくれたような患者さまとのエピソードは、私が歩んできたキャリアの中でも生まれています。入職当時、穿刺を失敗ばかりしていて、穿刺に行きたくないと思いつめた時期がありました。そんなとき、何度も腕を出してくれた患者さまがいらっしやいました。血管を腫らしてばかりなのに、「私で練習してね」「また来てね」と笑顔で声をかけて

くれました。その方のおかげで今の私があると思っています。

患者さまからお手紙をいただいたこともあります。透析を3時間から4時間に延ばさなければならなかったのですが、その方には「もうこれ以上延ばしたくない」という意向がありました。そこで、データを使いながら延長することの重要性を何度もお伝えしました。いきなり4時間ではなく、少しずつ延ばしませんかという提案を行ったこともあります。その甲斐あって、結果的には延長を受け入れていただき、後日、長文で感謝の思いを綴った手紙を頂戴しました。ペンを取るのには労力がいると思いますが、それでも思いを伝えてくださったことに胸を打たれました。クリニックのチームワークがあってこそだと思っているので、他のスタッフにも読んでもらい、今でもクリニックで大切に保管しています。



自己研磨に励み
最高の笑顔と安心を
提供します。

辻元晴也